

体験型ワークショップ1

『プレイバックシアター』

◇日時と講師

日 時：2010年9月11日(土) 13:45～15:45

講 師：橋本久仁彦（プレイバックシアタープロデュース代表）

アシスタント：辻 育子（児童養護施設 聖家族の家）、森 洋介（龍谷大学短期大学部）

◇企画の趣旨と概要

様々な領域で多彩なグループアプローチの研究と実践を行っている橋本久仁彦氏を迎えて、「プレイバックシアター」のワークショップを開催した。プレイバックシアターとは、「参加者がストーリーを語り、それをアクター達がある場で即興劇として演じ返す（プレイバックする）独創的な演劇」をいう。語られるストーリーは人によって様々だが、その場においては、相互の語り合い、分かち合いが本質的に大切なものとして、一人ひとりの思いと語りと表現が丁寧に受けとめられる。

人は誰しも、生きている限り、何かに行き詰まったり心が苦しくなったり、また逆に何かに心打たれたり喜びを感じたりすることがあるだろう。日常において、このような感情を内面的に深く掘り下げ、見つめ直す機会は少ない。しかし、もし、このごく日常の体験を丁寧に大切に扱うことができれば、人は、自らの中にいつもと違う感性が開かれていくことを感じ、また思っている以上に豊かな自分を感じることができるのではないだろうか。プレイバックシアターを通して、過去のストーリーの見え方が変わると、人生の意味あいそのものが、それまでと違った新たなものに感じられ、新たに受けとめられることも可能となる。プレイバックシアターでは、そのようにして守られた暖かで安心できる人間関係の中で、自らの経験や願いを率直に自由に表現することができる。そして、自分自身の体験を丁寧にとらえ直すとともに、他者のストーリーの中にも自分自身を見つけることによって、互いに共感しあい、相手をそして自分自身を大切にできる貴重な力を得ていくことができる。

参加者は、このプレイバックシアターのワークショップの中で他者に対して自分自身を開示していくことによって、自分自身に深く出会い直すプロセスを体感し合った。さらに、対人援助の視点から、“他者の心に寄り添い触れていく”には、援助者自らが自分自身を知っていること、そして自分自身を大事にできることが必要なのではないかということを開き直した。

◇参考文献

- 1) 森 洋介『プレイバックシアター実践の具体的あり方についての一考察 —パーソンセンタード・アプローチに学ぶ—』鈴峯女子短期大学研究集報人文・社会科学第55集（2008年）
- 2) 森 洋介『ソーシャルワーク実践としてのプレイバックシアターの可能性 —被爆体験継承活動を通して—』鈴峯女子短期大学研究集報人文・社会科学第53集（2006年）
- 3) 羽地朝和『プレイバックシアター 語る中で生まれかわるもの』現代のエスプリ 459, pp. 174-188（2005年）
- 4) 宗像佳代『プレイバックシアター入門』明石書店（2006年）